

# 霞

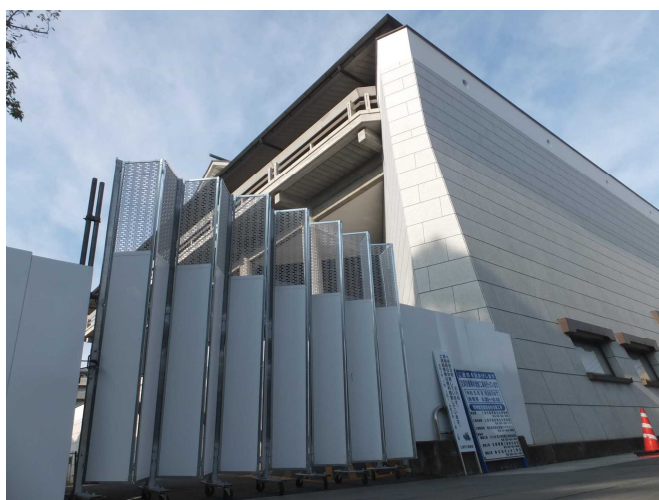
— 2022年度 博物館だより —

土浦市立博物館  
令和4年12月1日発行(番外第6号)

土浦市立博物館は、大規模改修工事のため、令和4年7月5日(火)から令和6年1月上旬(予定)まで休館いたします。博物館だより「霞(かすみ) 番外」では、毎月、工事の進捗状況や館外で開催する展覧会や講座の情報をお伝えします。休館中の「おうちミュージアム」(解説動画)では、土浦市内の史跡や文化財などの見どころを紹介します。

## 博物館は休館中！(6)「仮設作業の進む博物館」

改修工事を本格的に進めるため、博物館脇の第2駐車場の一角に工事事務所が設置されました。このため、ご不便をおかけいたしますが、博物館の敷地は通り抜けできません。



博物館入口の仮設ゲート



博物館の敷地は通り抜けできません

## ◆土浦城御城印帳のご紹介◆

現在無料開館中の土浦城東櫓では、「土浦城御城印帳」を販売しています。

色は藍と朱の2種類があり、番外第5号でご紹介した御城印(約14.5×10.5cm)が42枚収まるサイズです。それぞれ1冊2,500円での販売となります。



御城印帳(表紙)



御城印帳(裏表紙)

デザインは2色とも共通です。



博物館マスコット  
亀城かめくん



# 石とレンガの桜橋

—近代土浦のランドマーク—

土浦駅西口のロータリーでバスに乗り、亀城公園方面に向かって少し走ると、「桜橋」バス停の車内放送が流れます。初めての方は、どこに橋があるのかと疑問に思うかも知れません。実は、駅前通りと旧水戸街道の交差点（中央一丁目・中央二丁目）にある「桜橋」バス停付近には、近代的な意匠<sup>いしやう</sup>の桜橋がありました。昭和7（1932）年、道路や商業地の拡張にともない、川は暗渠<sup>あんきよ</sup>として埋め立てられ、橋も姿を消しました。

桜橋の始まりは江戸時代までさかのぼります。もともとは木造の橋で、水戸街道による陸上交通と水運で栄えた川口川の結節点に架けられ、周辺地域は長らく土浦の商業・経済の中心的位置を占めました。

近代的な桜橋は明治34（1901）年12月に造られたもので、欄干<sup>らんかん</sup>は白い花崗岩製<sup>かこうがん</sup>で、橋脚は赤褐色のレンガを積んだ重厚なアーチ橋でした（写真1）。旧来の建物や構造物が建ち並ぶ土浦のまちなか<sup>まちなか</sup>にあって、近代的な桜橋は人々の目に新しい時代を感じさせ、まちのシンボリックな存在であったと思われます。

現在、橋があった交差点付近には、明治期創業である保立食堂の角に「桜橋」と刻まれた石製の親柱<sup>せきせい</sup>などが残されています（写真2）。親柱とは橋の両端に4本立てられ、欄干と一体となり橋を構成するもので、それぞれの正面には橋名やその読み方、築造年月日などが刻まれました。石製の親柱は40cm四方・高さ60cmの直方体の石柱に土台と笠が付きます。この親柱の左には大正9（1920）年に設置された「土浦町道路元標<sup>どうろげんびょう</sup>」があり、レンガ塊が置かれています。レンガ塊は道路下となる橋跡の掘削工事で掘り出されたもので、現在もレンガ造りの橋脚が残っていることを示します。このほか、桜橋跡から旧水戸街道を南側に進んだ不動院の参道には、別の親柱が2つ並んで今も残され、一方には「明治三十四季十二月竣工」「山之莊<sup>やまのしょう</sup>村字本郷 石工 萩島定吉」、他方には「さくらはし」と刻まれています。

道路元標は、当時の市町村の中心の場所に建てられるものでした。当時の土浦の中心の場所に架けられた近代的な桜橋の姿は、そこに暮らす人々のランドマーク的存在であったことを感じさせます。（関口 満）



写真1 大正時代の桜橋（中央の○印がアーチ橋）



写真2 桜橋の親柱（右端）とレンガ塊（左端）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

霞（かすみ） 2022年度 博物館だより（番外第6号）

編集・発行 土浦市立博物館 茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928 FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

博物館だより「霞」番外第7号の刊行は、令和5年1月5日（木）を予定しています。

※「霞」バックナンバーは、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー版）